



第 15 回 風景デザインサロン・レポート

子守唄の里・五木村再生の取り組みと、頭地代替地のランドスケープ計画・設計

第15回 風景デザインサロン・レポート

『子守唄の里・五木村再生の取り組みと、頭地代替地のランドスケープ計画・設計』ワークショップ

1) 概要

日時：平成22年8月20日（金）～21日（土）

ワークショップ第1部

8月20日（金）

14:00-16:00 意見交換会 @五木村役場

発表者：徳永哲氏，木下文二氏（五木村副村長），橋本悦治氏（観光協会会長），和泉大作氏（建設技術研究所）

進行役：石橋知也氏（福岡大学工学部社会デザイン工学科 助教）

16:30-17:30 現場見学会 @頭地代替地

ワークショップ第2部

8月21日（土）

9:00-11:00 村内奥地の集落環境をめぐり

場所：子守唄の里・五木村 熊本県球磨郡五木村甲，五木村役場

講師：徳永哲氏（株式会社エスティ環境設計研究所所長）

主催：風景デザイン研究会

2) 趣旨説明

第5回風景デザインワークショップの事例発表会において議論された「子守唄の里 五木の村づくり」の現場見学会です。川辺川ダム建設計画に伴う頭地代替地である「子守唄の里」は、土木学会デザイン賞優秀賞，日本造園学会賞（技術部門）を受賞しており，細かなところまで配慮された，デザインの優れた作品です。また同時に，現代における中山間地の暮らしや公共整備の在り方に対して，すぐれた問題提起となっています。第15回風景デザインサロンは，現場見学と意見交換会の第1部と周辺集落見学会を含めた第2部の2部構成で開催されました。



子守唄の里・五木村 頭地代替地

3) ワークショップ第1部 意見交換会

第1部の意見交換会では，木下副村長より「五木の村づくりの経緯と今後への期待・課題」，徳永氏より「頭地代替地の景観整備」，橋本会長より「五木村の観光振興の課題と方向性・頭地代替地の住民として思うこと」，和泉氏より「風景を守るための振興計画（頭地代替地をソフト・ハード面の両方から見て）」と題した発表がされ，石橋氏の進行によって質疑が進められました。

<発表内容>

石橋：

今回のサロンは，五木村の「再生」がどのように進められていくべきか，ということを実質的なテーマとして進めていく。



五木村役場での意見交換会の様子

木下氏：

五木村は明治以降、一度も合併しておらず、江戸時代からのエリアに村民は暮らしている。ダム建設と村づくりには紆余曲折あった。ダムの建設は S38～S40 の大水害を受けて、S41 に計画されたもの。村がダム建設と村の振興策を容認したのは、H8. 10 のダム本体着工同意の協定書、村の振興に関わる覚書を国・県・村で調印した時。その後、大きな出来事は H20. 9 の県議会において、蒲島知事が川辺川ダム計画の白紙撤回をしたこと。また、H21. 9 には民主党政権となり、前原国交相が川辺川ダム中止を明言したこと。頭地代替地は H5. 11 に一部着工し、H8. 11 に本格着工となった。村づくりについては、H8～H27 までの 20 年間の長期計画「五木村ルネッサンソン」という、子守唄の里づくり計画を策定。知事がダム建設の白紙撤回を宣言された後、知事自ら五木村の再生本部長となって、県が五木村の振興基金を創設した。5 年間で 10 億円を積み立て、10 年間かけて村の振興に投じていく予定。実質 H21. 9 から動き出し、ふるさと五木村づくり計画として村と県とで協働して進めていくもの。五木村の将来に対して、奥地の村民も含めて不安に思っているところ。国と県と村による三者協議を行い、住民の声を聞いていこうという動きになっている。現在も村としては、ダム中止を容認はしていない。

徳永氏：

H1 から仕事で五木村に来ている。主に、頭地代替地の景観整備計画を行ってきた。ダム建設によって、村の中心地である頭地まで水没する予定であったことから、その移転先の計画である。山村である五木の環境は標高が 200m～1, 500m くらい。九折瀬（つづらせ）のような山肌にへばりつくような集落が数多く築かれてきた。ほぼ等高線に沿って、山の上に行くにつれて降水量が多い。明治以降の拡大造林によって雑木の山が人工林に変わっていった。人工林の保水力が乏しく、水害などが増えたのではないかとされている。林業で栄えていたころは、人口が 6, 000 人以上あり、現在は 1, 300 人にまで激減している。頭地代替地の景観整備を任せられ、人口減少に対して五木村の社会を持続するにはどうすればいいか、ということも考えていた。山村というのは、平野部の農村と比べると経済的に厳しい面があった。頭地代替地を考える上で、五木村全体をみていかないといけない。H1 までの計画では、安全に配慮し利便性を念頭に置いた基盤目状の区画であった。村内には茶畑、炭焼きの小屋、水汲み場、イチイガシ、コジイ、イチヨウの大きな木がある。これらを代替地に持ち込むにはどうすればいいか、ということを検討してきた。ルネッサンソン計画もあり、頭地代替地を五木村の中心として山村の振興の拠点としよう、ということで景観整備にも力を入れてきた。設計が大体終わっていた計画を約 5 年の間に、検討見直しを行ってきた。H5 頃からいろいろな話し合いの場がもたれ、橋本さんを若手のリーダーとする「水よう会」という場もあった。景観の面で頭地代替地に持ち込むものとして、村民の方々の印象は、建築では五木東小学校の校舎（S11 竣工・木造）があった。校舎も素晴らしいが、校庭が豊かな緑に覆われており、フクロウとかモモンガが棲みついていた。これらが失われることを残念がっていた。茶畑などの農地もどのようにとり入れられるのか、ということが話題にあった。宅地の段差処理、段差に「里道」を設けることで、もともとの五木村を感じられるのではないかと、ということで計画に盛り込んだ。H9 に「里道」を試験施工している。モックアップしたことで、住民にとって具体的にその意味を理解してもらうことができたと思う。擁壁の表面については、大ぶりの石を使うしかなく（施工性）、理想は棚田の雰囲気のある石垣が良かった。代わりに、擁壁の足元を緑化するスペースを設けている。できるだけ、移転する前の樹木を移設する計画とした。当初計画よりは少なくなってしまうが、大きな樹木は移設している。建築については、役場を設計コンペにするなど、公共が民間を先導している。住宅については、熊大の内山研に村内の建物調査と新しい住宅のモデルを作ってもらっている。

橋本氏：

H3 に脱サラをして、五木村に帰ってきた。800 年前からあった豆腐の味噌漬けをよみがえらせて、熊本の名産とした。その思いから作り上げた「山うに豆腐」を全国に PR している。五木村には、S40 からすると 27%の人口しかいない。ダムに基づいた五木村の再建に頼りすぎた面がある。観光立村をしていく動きが弱かった。代替地自体が、例えば白川郷のような、趣のある景観になれば良かったとも考える。子守唄の「ふるさと」をテーマとしながらも五木の子守唄の認知度が低くなっている。NHK のおやすみ前の番組で S25 から約 3 年間、音楽が流れていた（美空ひばりや森繁久彌も歌ってきた）。40 代、50 代の方は知っている名曲。五木の子守唄に携わるようなイベント、体験型のそば打

ちなどができるようにしたい。子守唄の里がどこか分かりにくいことも改善していきたい。

※橋本氏は、CD ラジカセを持参され「学生さんたちは知らないだろうから…」と正調 五木の子守唄を流してくれた。
和泉氏：

会社に入ったのが H3。川辺川ダムはうちで設計したダムで若いころは代替地の設計に関わっていた。実は、川辺川ダムは五木村ではなく相良村にある。ただ、一番大変な思いをされたのは五木村である。H12 から水没地の自然環境の調査、H14～H19 は五木村の振興に関わる仕事をしてきた。土木技術者ではあるが、観光の仕事もしている。福岡で観光の審議委員をしたり、農業もやったりしている。特産品の開発のアイデア出しとして、「アピオス」というのがあった。五木村にはホドイモというのがある。その親せきに当たる。メグスリノキ、五木セリ、ワサビ、クネブ、という既存の植物もある。鹿肉の流通やおいしい水の検討、大イチョウの保存、観光意識調査、「やませみ」のリニューアルなどもやってきた。ここで五木村の来訪調査を紹介したい。五木村の観光目的として、紅葉、自然探索が多かった。五木村の名前も知られている。誰が来ているかというと、家族、友達、親せき、けっこう一人もいた。満足度は圧倒的に高い。五木村で使ったお金は、食事で¥3,000～¥5,000 くらい、買い物は¥1,000～¥2,000。ほとんどの方が五木村にもう一度来たいと言っている。村民の方のアンケートでは、一番の誇りは「村の自然環境」、次は「村民の人情」。五木村の活性化に必要なのは、「観光施設の整備」、村の活性化施設は「働く場」であった。景観の話をする、私の自慢の写真にある、頭地橋（T15 竣工）は成人式や結婚式に使われる晴れの舞台であった。このような古き良き風景を観光客も求めて来訪している。

<意見交換>

■参加者→徳永氏

（結城勲：福山コンサルタント）

- ・様々な魅力あふれ住みたくなる集落形成がなされ、今後の団地再生やエリアマネジメントへの展開も考えられますが、当初の造成移転計画と現計画でのコスト比はどの程度でしょうか

> 計算はしていないが、現地形に合わせるということで、大分少なくなったのではないと思う。ただ、表面材に石を使うなどしているの、コストは少し上がっている。トータルで見れば安くなっていると思う。前計画（H1）では、移転対象戸数が 225 戸、最終計画では 120 戸くらいで、最終的には 80 戸程度になっている。結果的に、住宅まわりにゆとりを持った計画ができている

（青井克志：西日本技術開発）

- ・村・県・国と事業主体がいろいろあると思いますが、どのようにコンセプトの共有と調整を行っていったか

> 調整会議があった。国も県も担当の方々の異動があるし、担当者の雰囲気もある。人によってというよりは、懸案事項の密度によって差は出るが、H11～H13 ごろが景観整備の上物に関わる時期で、調整会議の回数が多かった。後ろにいらっしゃる、総務課長の石田さんと課長補佐の森田さんは調整会議の中核となって活躍された歴代の担当係長さん

- ・村内住宅の実測調査について、五木村の住宅にはどのような特徴があるか。現有の住宅にどのように反映したか

> 八代などの平野部には、“みのこ造り”という、屋根が厚ぼったく乗った感じで、鯪があったりする。五木では、五木様式とまでいえるような厳密なものはない。屋根を軽快に乗せた、どちらかといえば簡素な造りで、現在の住宅への反映と言え、この簡素な造りを踏襲している。中には五木の旦那衆（元の地主さんたち）の家には隠れ二階というものはあった。

・頭地代替地のランドスケープデザインの取組みに対して、住民や行政の中でも否定的な人もいたと思いますが、苦労したことは

＞コンサルタントの私が苦労したというよりは、担当の係長さんたちが苦労されたと思う。心がけたのは、繰り返しの説明に徹することだった。模型での説明や、住宅建築相談所を設けて、いつでも相談を受けられる体制がとられていた。

（西村菜美：九州大学 修士1年）

・ランドスケープ的な視点と子守唄の里としての風景のイメージを再生しようという視点両方があったと思うのですが、特にどこはどちらの視点で中心的に考えたというものがあれば

＞二つを分けてとらえたつもりはあまりない。代替地全体でいえば、たとえば役場前の通りを村の中心としていて、国道は通過する車も多いので、一本入った道は村内の人が買い物をしたりする道にしようと、役場前の通りにもっとお店が立ち並ぶ想定だった。実際は、住宅だけの通りとなってしまうている。

・水没地域の中で、地元のみなさんが代替地に反映したいと1番に思ったことは？

＞賛成、反対あったが、移り住んだ後は「なごやかに暮らしたい」といった人情的な感じではなかろうか

（平田晃久：熊本大学 学部4年）

・先ほど、五木村を軽く回ったのですが、その際、植樹されている木々がたくさんあり、中にはネームプレートがついている木がありました。なぜネームプレートをつけているのですか!?

＞これは、役場で付けられましたか？（小公園に付けています）特別に議論したということはないが、村内の子供達も意外に村の木の名前を知らないということはあった。通りにネーミングをしてもらった、というもある

（深川毅一：九州大学 修士1年）

・基本コンセプトに地域外からも「訪れてみたいイメージ」とあるが、具体的にどこにそのようなデザイン、仕掛けを設けたのか？また、「訪れてみたい」というのは観光目的の意味なのか？

＞ルネッサンソン計画では、いわゆる従来型のバスで来て帰るという観光とは違って、少しでも山村の体験ができるような、ややこじんまりした観光、今でいうツーリズムのようなイメージ。頭地代替地において景観整備のハード面では特別な仕掛けは用意していない。ただ、“日本のふるさと”というイメージを妨げるような鉄筋コンクリートのビルや派手な看板は無いようにした。民家の庭先に柿の木があったり、小豆などをゴザでも干したりしている雰囲気自然に再生されることを望んでいる。

・「里道」は整備前に何かを根拠にしてデザインしたのか？例えば、旧地区における利用に基づき、あづま屋の設置や、樹木のレイアウトを行ったりしたのか？

＞「里道」については、旧集落地に車の通れないような裏道というか、抜け道が縦横にあった。それを代替地にも取り入れたもの。元々、慣れ親しまれたものだった。樹木のレイアウトは、旧集落地に存在していた樹種を全て調べ

上げた上で、郷土種だけで構成している。

（波木健一：福山コンサルタント）

- ・頭地の人々にとって川とのかかわりには強いものがあつたかと思います。代替地のデザインにおいて、その点を配慮したところがありますか。また、ランドデザインとして、ダム湖面と代替地のかかわりをどうイメージされましたか

＞緑以上に水とのかかわりが強い、というのはあつた。旧集落地を歩いていると色々なところから水音がする。旧役場の前を流れる水路は、たまたま段差があつて、その付近を通るといい感じで水音がしていた。旧集落地では、見た目は側溝のようなものでも音はしていた。代替地を議論する上でも、元々水とのかかわりが強かつたとの声が多かつた。子守唄にも「水は天からもらい水」という一節があるくらい。それで、代替地内でも水の演出をしてほしいという要望が強かつた。幹線道路とされる役場前の通りと里道の一部には、水路を入れた。残念なことは、水路の作りが昔ながらの作りではないこと。修景的になっているので、緑によって将来変わっていくことを期待している

＞（和泉氏）流路工の水は上の流域ではなく、演出の水。高い山はあるが、そんなに流域がない。水は以前ポンプアップで持ってきており、今は簡易水路で入れている

・（波木健一：福山コンサルタント）

先ほどの写真を見て、若い人たちが橋を渡っている象徴的な写真があつた。川辺川が真ん中にあつて、橋があつて、生活が営まれていた。川辺川と人の暮らしの関わりがかなりあつたと考えるが、暮らしの中にあつた水とのかかわりが反映されているのか、ということを知りたかつた。ダムができると、広い水面のそばに代替地がある、というのが最終的なイメージ。そのあたりをどのように考えて作られたのかを教えてください

＞（徳永氏）ダム湖面と代替地の関係については、「かかわり」の積極的な方向ではあまり深い議論はしていなかつた。というのは、今の中学校のグラウンドの用地は通称前面盛土というもので、ダム湖面の満水位に近い高さで設定されている。もっと以前は代替農地という扱いで、湖水面に近い場所は住宅ではなく農地の扱いとして設定。ダム湖の水位の設定が、洪水調整機能に基づいて、夏場の期間は水位をほとんど落としてしまう、冬場は農業用に溜めるという、二段階ある。一番水に触れる時期に頭地の周辺では、水がない状態。干上がった時に砂が巻きあがらないかといった、マイナス面の心配があつた。そのため、ダム湖での新水の話は進まなかつた

＞（和泉氏）ダム運用の都合上 30m も水位差があるので、干上がった時の裸地をどうするのか、という景観の面での議論はある

（小川正人：九州大学 学部4年）

- ・代替地へ移転させたいもののリストを作成して優先順位の高いものから移転させていった、とありましたが、そのリスト作成にあたっての規準や優先順位決定の規準があつたら教えてください

＞建造物については、記念物的な、慰霊碑やお墓を優先し、樹木関係は直径 30cm 以上のものを移植対象に。樹木の専門家も呼んで、鑑定をしてもらい、最終決定をした。樹木は直径 60cm とか、大きいものが優先された

- ・様々な調査によって読み取った“五木村らしさ”を具体的な設計におとしこむ方法にはどんなものがあつたのかについて知りたいです

>まさに、このことをするためにHI から村内を調査し計画をしてきた。一番大きいのは、住民の方々がそれをどのようなことで感じているのか、雰囲気とかをどう扱うのか、風景デザインの研究のテーマでもあるところと思う

■参加者→橋本氏

(小川正人：九州大学B4)

- ・観光立村を目指すというお話やアンケート結果でも観光をもっと活性化させてほしいというお話がありましたが、観光と村民にとっての暮らしやすさは両立しえるか？観光を重視するあまり、本当の意味で五木らしさを失ってしまう懸念はないのか？についてお話を聞かせていただきたいです

>14 歳以下が 150 名くらい、小中学生で 80 名くらいしかいない。この少子高齢化を食い止めるには雇用促進を目指しないと、いけないのではないかと考えている

(児玉菜月：熊本大学 修士1年)

- ・観光について、山うになど特産品を普及させる活動というのをされているとのことでしたが、それも含め、観光地となるために、その他行った活動について教えていただきたいです。また、その時に考えている対象となる人はどのような人でしょうか。先ほど周辺を少し見て回ったのですが、とても印象的だったのはやはり自然でした。周りを囲む壮大な山々と、流れている水路に川、さらに石垣が美しいと思いました。住民が誇りとしているこの自然（山とか）を美しく見せるために工夫したことやアイデアといったものはどういうものだったのでしょうか

>五木の観光に来られている方は 40~60 代がメイン。本当は若い方をターゲットにしたいが、40、50 代をターゲットにしながら進めていきたい。五木の子守唄を観光のキーワードに持っていきたい。取り組みとしては、サウンドセンサーから堂坂よしこさん（94 歳）の歌声が流れてくる設備を白滝公園に置いている

(鍋田仁人：熊本大学 修士1年)

- ・五木の子守唄は、今の若年層にはあまりなじみがないと思う。今後、外に向けて伝えることも大事ではないのか。場所の設定も大事だと思うのですが

>正調 五木の子守唄というのもある。「やませみ」に行けば聴くことができる。久領庵でも1日3回歌声を聴いてもらっている。元々、小学生や中学生の子たちが子守奉公に行っているときに歌ったもの。子供を寝かしつける歌ではない

>（徳永氏）明日の五木巡りの時に、案内をしてもらおう豊原さんに正調を歌ってもらおう予定

(波木健一：福山コンサルタント)

- ・観光振興のための資源として、住民の方々の暮らしぶりや生活の中心の技術等を、情報発信していく取り組みは行われていますか

>観光協会は去年独立したばかりで、25 年前から少ない予算ではやってきたが、本格始動は昨年であるため、取り組みはまだ少ない。ガイドボランティアその他の体制も充実しつつあるので、これからが本番だと思う。

■参加者→木下氏

>（木下氏）川と水の関わりについて、思い当たったところがある。昔の写真では、川に近い所にある。首まで浸かったり、鮎を釣ったりしていた。各地にあったお堂が、代替地移転で無くなってしまった。現在は神社が一つ、お寺

が一つあるのみ。地区のつながりを危惧する点である。昔は大きなタンクが地区ごとにあって、水を分け合っていた。代替地では全て簡易水道になっている

（深川毅一：九州大学 修士1年）

- ・五木村の街並みは江戸の頃から変化はないのか？また、江戸の頃はこういった街並みだったのか？かやぶき屋根の家が並んでいた？

＞当時は五木谷という名前で出ていた。エリアが変わっていないだけで、街並みは変わっている。住宅も多くなり、通りも違う場所にあった

＞（徳永氏）やませみ資料館にある五木絵図（五木谷）を見ると、今の地図と同じ領域。民俗学者の柳田國男が明治時代に來たらしく、「畑」と「畠」の違いが分かったと。焼畑由来の「はたけ」との違いについて記述している

（古賀由美子：熊本大学 修士2年）

- ・昔は多くの集落が分布している図を見せてもらいましたが、現在はどのくらいの数の集落が残っているか教えてください

＞集落単位で言うと36ある。65歳以上が半分以上を占める限界集落が15ある。昔ながらの地域のつながりが難しくなっている。有害鳥獣であるサル、シカ、イノシシの被害が出ている

- ・五木村への観光客を増やすために、村から外に向けて発信している動きや今後考えているPRの方向性を教えてください。また、現在知っている人が少なくなっている「五木の子守唄」を再び知ってもらうために、どんなことが必要か、お考えがあれば知りたいです

＞五木村ファンクラブ（年会費1,000円）にて、情報発信を行っている。HPによる発信や、五木ちゃん号というバスを人吉まで走らせている

（山本慎太郎：西日本技術開発）

- ・ダム水没地の村中心部が話題になることが多いが、村の小集落はかなり疲弊してきているのでは。村全体や個別集落での振興策や景観等を含めた取り組みはなされているのか。

＞36の集落を6つのゾーンに分けたものがルネッサンソン計画の振興。その中で検討会を設け、地域の公民館の分館で連携を図っている。予算も増やして頑張ってもらっている。地区をつなぐ道路にモミジやネムノキを植えている

- ・地域振興・観光に力を入れるにも、人口定住がまず必要だと思うが、村外へ出た方のリターンなど定住対策はされているのか
- ・拡大造林後、現在伐期を迎えている山が多いと思うが、大規模な伐採による景観や環境への配慮（対策）はされているのか

（馬場啓維：熊本大学 修士2年）

- ・三者協議（国・県・村）を何度も行われたと言われていましたが、どんなことに苦労されたのか教えてください

- ・様々な景観整備の中で里道の現状のモデル化をされた時の住民の方の反応とその後の整備でどんな風に活かされたのかを具体的に知りたいと思いました
- ・観光を官民一体で考える場合、官として、民としてそれぞれどのような役割を果たしたら良いと思うか教えてください
- ・茅葺き屋根やおばあちゃんの干し柿などの昔の風景がどのくらい住民の方に印象付けられているのか。あるいは、住民が考えている自然環境はいろいろあると思いますが、何が一番（例えば、山、川、集落 etc…）重要だと住民が考えていらっしゃるのかを知りたいです

（吉田幸平：熊本大学 修士2年）

- ・子守唄の“里”としてまだ里といえる具体的な場所やモノがないというお話でしたが、この代替地を造る際にそこを意識した場所などはなかったのでしょうか
- ・立派な家が多いが、その多くは2〜3人の家族で高齢化も進んでいるという話を聞いたのですが、10年、20年後にこの地区を残すための取り組みなどは何があるのでしょうか

＞熊本県でも一番の高齢化率。代替地でも人が住んでいない家も1, 2軒ある。定住対策として、0〜15歳までは医療費は無料、五木に住んでよそに仕事に行く場合は、交通費を支援。住宅については頭地地区には土地がないことが問題。森林組合に70〜80名おり、人吉・球磨一帯では20数名が通勤できている。一人の方がお嫁さんと五木に住むことになった。このように五木の林業振興と含めて進めていければ良い

（波木健一：福山コンサルタント）

- ・ルネッサンソン計画において、将来的な地域の産業振興の柱をどう展望されましたか。また、その中での頭地代替地の役割をどう位置づけられましたか

■参加者→和泉氏

（川崎健史：熊本大学 修士2年）

- ・水没予定地にまだ集落があった時は“里道”のように名称のついた道などはあったのですか
- ・観光の考える際に交通アクセスが重要になってくると思うのですが、どのようにお考えでしょうか

＞期間限定の観光バスが走るようになった。従来からの路線バスは人吉から時間1本、930円で運行中である。ただし、五木村のイベントにはほぼ100%自家用車で来ている。参考までに観光動向を話すと、九州島内の人は九州島内の観光にほぼ100%自家用車で行く。五木村への観光動向も同じである。ターゲットは定年より少し上の夫婦。自分たちの親が亡くなって、故郷を失った人がふるさとを探しに来ている

（鍋田仁人：熊本大学 修士1年）

- ・水没地域が活用できるとしたら、現状として、具体的な案があがっているのか？また、住民が水没地域が活用できるとして、再びそこに居住したいとかがえているのか

＞川辺川ダムには4つの目的がある。洪水から守る治水、正常流量の確保、灌漑用水、発電の4つ。雨が降ると、水

が溜まる。こうなると、緑が育たないし、土砂もたまる。今後のダム事業の動向によって検討内容が見えてくるのではないか。

（尾野薫：熊本大学 博士1年）

- ・大変興味深いお話をしていただき、ありがとうございます。今の子ども達、あるいは、これから産まれてくる子ども達は、新たな五木村で暮らし、成長していくことになるかと思います。そういった子ども達が、川辺川ダムも含めた五木村の歴史を知り、その歴史、あるいは村の記憶（といえいいのかわかりませんが…）を受けついでいくためには、どういったアクションが必要だとお考えでしょうか？あるいは、子ども達が進学や就職活動等で外に出ていった場合、「帰ってきたい」と思うためには、何が重要であるのか、もし、何かありましたらおしえていただきたいと思います

＞将来的には、自分が自慢できるふるさtoになっていくと思う

（深川毅一：九州大学 修士1年）

- ・頭地橋を成人式や結婚式の際に渡るといふ風習は、頭地ならではのものであると思う。もし、その橋がなくなるのであれば、地域にとって愛着ある橋を移設・保存しようという動きはないのか？

（荒巻祥大：九州大学 修士2年）

- ・「代替地における公共物は、まちの風格をつくるために、先導的に伝座員を行う必要がある」とされていたが、実際にコンペの作品を評価するにあたって重要視された「風格」や「地域性」とは具体的に何を指すのか。判断材料は何だったのでしょうか

（稲永哲：熊本大学 修士2年）

- ・頭地地区の建物には、いろいろとデザインコードを与えていますが、生活する中で住民から、もっとこうした方が良いか、この規制はジャマだみたいな、意見が出ていないのか？出た場合どうするのか？
- ・産業として“観光”に力を入れ、雇用を増やすことで、Uターンで帰ってきてもらったり、というお話があったが、戻ってくる人や新たに入ってくる人に対するサポートはあるのでしょうか？（お金とか、コミュニティとか…）

4) ワークショップ第1部 現場見学会

徳永さんの解説のもと、頭地代替地を参加者で歩きました。



意見交換会でも話題となった流路工



五木阿蘇神社の神職さんからお話を聞く



代替地の通りは緑にあふれている



こちらも緑の多い「里道」を抜けていく



新しい五木中学校と奥が水没予定地域



懇親会で徳永さんより昔の写真を見せてもらう



子守奉公の様子



橋本さんによる頭地地区の説明
「昔の久領集落には、川に沿って本通りがあった」

5) ワークショップ第2部 現場見学会

二日目は、村内奥地の集落環境めぐりをしました。新しい頭地代替地だけではなく、元々の五木の様子を知る見学会です。コースは九折瀬（つづらせ）→平野（大イチョウ、お堂、水汲み場）→宮園（五木北小学校：今年度閉校）。



観光協会の豊原さんに案内をして頂く



九折瀬にある山肌の住居と段々畑



宮園の大イチョウ



お堂で地元の方とお話をする



今も残る水汲み場



茅葺き屋根の建物で正調 子守唄を聴く

6) ワークショップ第2部 現場見学会の参加者の感想

これまでに何度か話に伺っていた五木村を実際に見て、体験をすることができ、やっと、仕組みと空間を結びつけることができました。特に、2日目に案内していただいた奥地集落は、日本の里山を知らない若い世代にも響く、昔ながらの日本の原風景を伝える地としてとても重要であるということ、改めて実感しました。

一方で、人口の減少や少子高齢化といった現代日本が抱えている課題が顕著に表れている地でもあることは事実かと思えます。そういった地域に、観光産業や農林業を支えていくための若い人が入ればいいのか、というと、それもまた少し違う気がしてなりません。やはり、奥地集落で印象に残った風景は、里道や古い民家、そしてそこに溶け込むように暮らす高齢者の姿でした。若い人よりも、退職し、子供も離れた夫婦のような人が、第二の人生を送る場所として日常的に住み続ける方が、五木村らしい風景となるのではないだろうか。あるいは、週末に訪れるセカンドハウスや、外国人観光客等に向けて、日本の原風景を体験する体験型観光の場として、非日常的に利用することができるのではないだろうか。そういったことを思いました。

第一印象は、川辺川やそこに架かるつり橋の美しさに、とても感動し魅力的な土地だと思いました。ですが山間部にある集落を回ってみると、人をほとんど見かけず、何かとても寂しい雰囲気でした。理由としては、集落に行くための道の舗装も悪く、とても不便な立地にあるためだと思いました。将来あの集落の人々がいなくなることを防ぐためには、土木の力で道路を改善し、アクセスし易くする必要があると感じました。

現在頭地地区だけが整備されており、他の地区とのつながりがあまりないように感じた。

これから他の地区との交流・つながりに重点を置いていく必要があると思った。

集落と川辺川との関係をもっと念頭に置いて考えていく必要があると思った。

奥地集落を見て、このままひっそりと消滅してしまうことが安易に想像できました。

記録映像や写真を多く残し、県内外の人に伝える機会が増えればいいなと思います。

何をやっても人口減少は止められない気がして、すごく悩みます。

高地に高齢者を中心に暮らしているので、大きな災害が起こった時の恐ろしさを感じました。

それに対応できる防災に関するシステムや行政の支援を考える必要があると思いました。

あれだけ美しい棚田の景観を残したいという思いも分かるが、後継者やあそこで農業をやりたいと言う人が果たしているのかなと思います。人の生活が最優先なので、極端な意見を言えば、農業を続けられないのに無理に続けてまであの景観を残す必要はないと思いました。

もう行われているかもしれませんが、奥地集落に後継者を残したいのであれば、若い人に農業や観光産業の楽しさを肌で感じてもらう体験農業や、五木村にリターンで戻ってくる人には、それなりの支援が必要だと思いました。

頭地代替地においてすでに人の住んでいない家があるという現状はそれより上の方にある集落の今後についても早急に何かしらの対策を取らないと大変なことになるということを肌で感じた。

観光に関しても力を入れていることは感じたが、やはり観光も住民の生活の上に成り立つものであって、観光で賑わったとしても、生活が成り立たなければ意味がない。その辺りのバランスが本当に難しいと思った。

都市部にアピールしたり、観光に利用する「五木らしさ」と「入居後の生活」のギャップを埋めることが大事だろうなと思いました。

○五木村を存続させ、元気にさせるために必要なもの

- ・「人」（人口減少を食い止め、できれば増やしていきたい）

→リタイヤ層より、働き手になる若者（30代くらいまで）のほうが喜ばしい

○若者に住んでもらうために必要なもの

- ・働く場
- ・現在住んでいる地域にはない魅力
- ・生活に困らない（利便性、安全性）

○五木村が力を入れている産業

- ・観光（人呼ぶ、働く場になる）

○何を目指して観光しにくるか

- ・自然浴（紅葉やキャンプ、避暑とか）→娯楽
- ・体験型宿泊：干し柿、畑、釣りとか？（昔ながらの自然との共生を体験）→生活型娯楽
- ・物産（豆腐、そば関連の商品＋新規枠）

⇒五木村の魅力（たぶん）：自然（との共生）

○観光による働き方

- ・飲食業
- ・公的機関職員
- ・体験型宿泊施設の管理

→五木村の魅力と、働き口の環境にギャップがある。でも、まあ、しょうがないのかな。

○結論

新たに入ってきた人が、体験型宿泊で行ったことに類することは
できるような環境をつくる or 残す必要があるのでは？と思います。

（ハードでもコミュニティ（「私」と「私」間の曖昧な関係）といったソフト面でも。）

そのために、現入居者が自然との共生を続けることや、第一次産業を残すというのは大事だと思います。

そう言った意味で、頭地地区が何年後かに、馴染んで境界が曖昧な集落になればと思います。（里道、水路などが効いてくるのではないかと思います。）

7) おわりに

天候に恵まれ、内容の濃い二日間のデザインサロンを開催することができました。木下副村長、橋本観光協会会長、和泉さんには、お忙しい中にもかかわらずお時間を割いていただき、初めて五木村を訪れた参加者にもわかりやすいご説明をして頂きました。心より感謝申し上げます。そして何より、徳永さんには、講師としてのみならず、事前準備からお世話になり、意見交換会、現場見学会、懇親会と参加者が楽しくも勉強になる情報をご提供いただきました。心より感謝いたします。このほか、会場などのご協力を頂いた五木村役場の皆様、五木村観光協会の皆様のご支援があって、開催することができたと思います。また、参加者の皆様から頂いた、たくさんご意見は今後の貴重な資料として活用させていただきたいと思っています。最後に、皆様の益々のご活躍をお祈りし、締めとさせていただきたいと思っています。